

社会福祉法人中央有鄰学院 広報誌

〒459-8001 名古屋市緑区大高町洞之腰20-1

児童養護施設ゆりん 乳児院ほだか ふれあいセンターおおだか

TEL 052-621-2441(代) FAX 052-622-5509

ぼくたち わたしたちが
あんなに楽しく
こどもたちのねがい



ゆりんだより

完成開所記念号



ご挨拶

名古屋市子ども青年局長 石井 久士

中央有鄰学院は、明治33年に設立された「豊橋育児院」にはじまり、ここ、大高の地に移られたのが、大正13年とうかがっております。以来、今日に至るまで長きにわたり、子ども達の福祉に尽くされてこられました。この間様々な実績を積み重ねられ、本日、児童養護施設「ゆりん」を建て替えられ、併せて、乳児院「ほだか」の完成を迎えられたところでございます。これもひとえに植田理事長さまはじめ、関係者の方々のご努力と、地域の皆様のおかげとご理解、ご協力の賜物と深く敬意を表する次第でございます。

また、できる限り家庭的な環境の中で、子ども達が成長できるように、小グループでの生活を取り入れた施設としていただきました。さらに「地域に開かれた施設を」というお考えのもと、地域交流スペース『ふれあいセンター「おおだか」』を設置していただきました。地域での子育て家庭の支援もしていただけたらものと、施設長さんをはじめ、職員の皆様の意欲的な取り組みに感謝申し上げます。

さて、名古屋市には、虐待などの様々な理由で、親と一緒に暮らせない子どもたち、約600人が児童養護施設に入所し、乳児院には、約100人の子ども達が入所しております。乳児院で暮らす子ども達の中には、家庭に帰ることができず、引き続き、児童養護施設へ入所する子どもも多くいますが、生活環境が変化することで、子ども達が受ける影響も少なくありません。

さて、本市では、「なごや子ども条例」に基づきこの3月に「なごや子ども・子育てわくわくプラン」子どもに関する総合計画（名古屋市次世代育成行動計画・後期計画）を策定し、「全ての子どもが安心して健やかに育つことができるようなまち、なごや」の実現をめざして参ります。そのためには、私も行政の努力はもちろん、議会や市民の皆様、事業者の皆様方のご理解とご協力が何よりも大切でございます。今後ともなお一層のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

この度の中央有鄰学院の建て替えにあたりましては、乳児院と児童養護施設を合築により建設していただき、0歳から18歳まで、一貫した養

育ができるよう施設環境を整えていただきました。乳児から青年期まで一貫した養育ができるようになりましたのは、名古屋市では、中央有鄰学院が初めてでございます。



完成開所のご挨拶とお礼

理事長 植田 望

お陰様で永年にわたる大きな夢がようやく実現することができました。これも皆様方の様々なご協力のお蔭と心から感謝申し上げます。

明治33年豊橋育児院として慈善救済事業を始めて110年、建物の老朽化や耐震上の不備などから建て直しが急がれ、永年にわたる建て替えへの働きかけの結果、名古屋市当局・公職者の先生方や多くの方々のお力により、施設の全面改築が実現しました。

全面改築を機に乳幼児期から高校卒業まで、一貫して安定した生活環境の中で生活できるように、乳児院と児童養護施設を同じ敷地内に併設しました。

また子育て不安や虐待等で家庭崩壊の家族の社会復帰のため、親子で一緒に生活訓練できる親子訓練室や自立に向けて一人で生活できるよう準備できる自立支援室のほか、心理相談のできるセラピー室や一時的に子どもを預かるショートステイの部屋も設けられています。

また地域の子育て支援事業や地域の皆さんに広く利用していただくための多目的ホールも設置しました。

新しく完成した施設で行う事業は、今までの中央有鄰学院を改め、ひらがなの「ゆうりん」と名前を変えました。

新しく始める乳児院は「ほだか」、地域の活動のためのふれあいセンターは「おおだか」と名前をつけ、この三つの事業を行う施設となります。

新しく完成した建物は、子ども達が安心して暮らせる、心身共健やかに成長するためにまず住むための環境を良くすることに重点を置きました。

床は無垢の板張り、家具はカリモク、食器は鳴海製陶、子ども達が安心して生活してほしいとの大人の願いを結集しました。

機会がありましたら、どうぞ私達の「思い入れ」をご覧になって下さい。

役員一同、子どもの幸せのため頑張っています。どうぞ皆様方の温かいご支援ご鞭撻を心よりお願い申し上げます。



八方塞がりの中
熱意と行動が様々な不可能を可能に

建て替えが無理だという悪条件のオンパレード…
本当に建つのかと心配していました

祝辞

名古屋市会議員（大高在住） 加藤武夫

中央有鄰学院の建て替えが立派に完成し、心からお祝い申し上げます。

学院の建て替え前の様々な困難な状況を知っているものとして、本当に建つのかと心配していましたが、よくここまでこぎつけたと思います。予算のこと、用地のこと、建蔽率・容積率のこと、工事中の仮住居の問題等、この場所で建て替えが無理だという悪条件のオンパレードであったことについては、多くの方々もご承知のことと思います。

八方塞がりの状況の中で、植田理事長、二村施設長お二人の、子どもに対する深く強い愛情の発露・・・「子どもをの為になんとかしたい」というお二人の信念に裏付けされた行動が、沢山の方の共感を呼び、心を動かしました。その熱意と行動が様々な不可能を可能にし、様々な課題をクリアしてきました。合

わせて学院の職員の頑張り、理事の皆さんの支援、地域の皆さんの協力によって今日を迎えることが出来ました。ご尽力いただいた皆様に深く敬意を表したいと思います。

この児童養護施設は、いろんな特徴を備えた先進的なものであります。名古屋市として始めて整備された乳児院と児童養護施設の複合施設は、地域の子育ての支援の拠点、生活している子ども達の自立支援の拠点、帰る家庭のない子ども達のふるさと代わりの拠点として大いに期待されています。

このすばらしい施設で、職員の皆様のあふれる愛情によって子どもたちの個性、能力、創造性、思いやりの心をしつかり育んでいただき、いつもいつも子ども達の笑顔の絶えない学院でありますよう期待し、お祝いのご挨拶とします。

育てなおしの環境を与えられて

～新舎完成後 半年を振り返って～

児童養護施設 ゆうりん
乳児院 ほだか
ふれあいセンター おおだか
統括施設長 二村 繁美

新舎が完成し、仮舎からの引越した後、約半年が過ぎました。

児童養護施設「ゆうりん」を建替え、乳児院「ほだか」、ふれあいセンター「おおだか」の新設に関して多くの皆様から手を差しのべていただき完成に至りました。この半年間、新舎を使用して子ども達の「育てなおし」をする「生活の場」がやっと整備されたと実感をしております。改めて感謝申し上げます。

「ゆうりん」旧舎は、寮のよう
で生活体験ができず、また人間
関係が育みにくい大舎の集団生
活でした。それが、一般家庭と
同じ小舎6軒になりました。こ

の変化に子どもたちからは、「お家みたいな家」との感想が聞こえてきます。この「お家みたいな」の一言に「存在」を大切にされてこなかった子どもの数々の想いがこもっていることを思わずにいられません。

子どもたちは家庭から離れて暮らすことに、また家庭での生活の行き詰まりという事態に“納得のできなさ”“気持ちの混乱”を味わい、心の整理が出来ないままです。成長途上の子どもにとって耐えるにあまりある深刻な体験を経て重荷を背負ってここに至っています。また成長期に必要な教育やしつけを十分に受けられず、立ち遅れた





所からやり直しが必要な子ども達です。

そんな子どもたちには何より安心して暮らせる環境がまず必要であり、次に職員に「大切な存在」と受け止めてもらえることではじめて自らが「自分というもの」を育んでいく、もしくは再スタートさせていくのだと思います。子どもたちが、「生まれてきてよかった」と思い自信をもてるようになることが社会

的養護の場「ゆうりん」の目的と考えています。「育てなおし」をすることです。また大人と過ごす日々の生活は子どもが発達にとっては根幹となるものです。やっと今家庭的な温かさや関係性が伝わる生活環境と生活空間が用意されました。子どもたちにさりげない配慮がこもった日常生活が積み重ねられ、自分たちは生きていて幸せだと感じてほしいと思います。

「ほだか」では、新生児、一週間からの赤ちゃんをお預かりしました。また、家庭の事情で育ちの遅れた子どもたちや、傷ついた子どもたちもお預かりしました。小さな生命を守る緊張と育つ健やかさ、育ちなおるしなやかさから安らぎをもらってきました。「ごく早い時期からの育てなおしの場」という併設目的は、意味あることであります。また、「ゆうりん」の子どもにとって「ほだか」の赤ちゃんとつらなる自分の存在をみつける機会も得ました。名古屋市

内で初めてのユニット制という環境を用意出来ました。子どもと職員の関係を大切にし育んでいきたい想いです。

子育て支援事業「おおだか」では、毎日、ベビーカーで多数の地域の親子の皆様に来ていただいています。この地域で予想以上に多くの方々が「子育ての場」を必要としていたことに驚きました。「ゆうりん」、「ほだか」の子ども達も参加しています。また、職員も一緒に子育ての場で勉強をしています。毎月2回開かれるリフレッシュママ講座は、ヨガ、フラワーアレンジメントなど専門の講師により、ママのお楽しみ会となっています。

過去には、ゆうりんは多くの子どもたちの成長をはかりましたが、子どもが苦しみを味わう場でもありました。職員にとっても子育ての楽しみの場でもありませんでしたが多くの苦勞を背負いました。それらの経験が、礎になって今日の再スタートが出来まし

た。

しかし現在の社会的養護の制度は60年間基本的には変わっていない実状です。この制度のもとで、小舎やユニットを運営していくことはまた、職員の負担が生まれます。将来の社会にとって子どもたちは財産です。大切な存在としていくために、システムの充実をお願いをしたいと考えます。

今後、職員一同、地域や関係者の皆様からご指導いただき環境面に加えて内容づくりに一生懸命努力していく覚悟です。



ゆうりん

新舎での生活

以前の古い建物の時は、子どもが友だちをお部屋まで連れてくることは珍しいことでした。「古くてボロで恥ずかしい」と言う思いや、友だちから見れば、行き辛い雰囲気もあったのではないのでしょうか。しかし、新しい建物になり、開放的な雰囲気になったことで、友だちが遊びにくる姿をよく見るようになりました。自分のおうちへ



友だちを案内し、おうちの中で遊んだり、一緒に勉強をしたりすることに大きな喜びを感じているようです。また「こんなにキレイなおうちに住んでるんだよ!」という誇らしい思いを持っているようにも感じています。



仮舎鳴海寮の生活では、学区から遠く離れていた為、友だちと遊ぶことが難しく、また、毎日トワイライトに参加をしていた為、帰院後に遊ぶ時間もありませんでした。「友だちと遊びたい!」と

言う声を時々聞くこともありましたが、環境的に難しいことでした。

今の子ども達の生活を目の当たりにし、仮舎での生活ではそれなりに我慢していたということを改めて知らされることとなりました。

今後、施設の中だけに留まらず、友達や地域の方々と積極的に関わりをもっていけるように、子ども達を見守ってまいります。

環境整備

新しい建物が完成し、素晴らしい環境に変わりましたが、建て替えの間、裏の竹藪は1年間という短い期間でかなり荒れ果ててしまいました。そこで、子ども達と一緒に環境整備することにしました。子ども達は高校生を中心にみんなで協力し、一生懸命作業しました。力自慢の子はみんなにその力を見せつけようと頑張って竹を運んだり、身体の小さい子は、作業のお手伝いをしたり、草取りなどしたりと頑張りました。中には作業中にケガをする子もいましたが、最後までみんな力で力を合



せてやり遂げる事ができました。

竹藪整備の傍ら、坂をスコップで削って階段を作る子がいたり、細い竹で剣を作ってチャンバラをする子がいたり、環境整備の作業の中でもしっかりと自然を使った楽しみを見出すことができたことは、子ども達にとって非常に良い経験になったことと思います。

みんなで環境を整えることで、共に生活していく場を作る喜びを感じることができましたし、環境整備の取り組みを通して自然への興味がより一層深まったように感じています。



ほだか

5月初旬、それまで静かだったほだかが、笑いのある明るい空間に変わりました。ほだか一番初めの入所乳児となった1歳のY君は、笑顔が絶えずニコっとする表情がとても印象的です。食欲は旺盛で、食べ物にはとても興味を持ち、ご飯やおやつが来ると手を合わせて「いただきます」のポーズをとり待っています。ご飯が足りず大泣きすることもありますが、空っぽのお皿を見ると、「ごちそうさま」のポーズで手を合わせることができるようになりました。



ちびっ子の集いにも参加するようになり、沢山の友達と関わる時間も増えました。Yくんから友達に近づくに寄って行ったり、時にはおもちゃを取り合ったりと積極的に関わる姿も見られます。担当職員の見えなくなると、泣いて探しまわるようなこともあります。その分、着実に職員との愛着関係が築けているようにも感じています。子どもが少しずつ入所してきたことで、今まで気が付かなかった危険箇所や様々な問題を職員同士共有し合うことができるようになってきました。まだまだこれから施設の施設ですが、日々子どもと一緒に成長しつつ、よりよい施設になるよう職員のチームワークを高めていきたいと思っております。



ふれあいセンター

ちびっ子のつどい



4月26日(月)にふれあいセンターおおだかの「ちびっ子の集いオープンングセレモニー」を開催し、むらなが吟さんのギターの弾き語りや職員によるパネルシアターやリズム遊びを楽しんでいただきました。たくさんの子どもさんや保護者の方に参加して頂き、賑やかな会になりました。

「ちびっ子の集い」には毎回た

くさんの子どもさんと保護者の方に参加して頂き、リズム遊びをしたり、手遊びをしたりしていただきます。今は7月6日の七夕会に向けて、七夕飾りをお母さんと一緒に作っています。ちびっ子の集いが始まったばかりの時は「ママママ」といってお母さんの後ばかり追っかけていた子ども達も今はすっかり、ふれあいセンターの職員に慣れ、ママではなく、職員を呼びに来てくれるようになりました。「ハイハイ！」とうれしい悲鳴です。これからも仲良くしてね。



賑やかではあるけれど、
落ち着ける場所ではなく…

不向き、住みにくさは
想像を超えるものがあつた



旧舎から仮舎…そして新舎へ 食育を通して振り返る

主任調理師 永田 理枝美

旧舎での生活

今から4年前、中央有鄰学院を建て替えるという事で委員会がたち上げられ、どんな建物にしたらよいかを考え始めたことが、つい最近のことのように感じられます。その頃は、雲をつかむような話で、まさか、こんな立派な建物になるとは、想像もできませんでした。旧舎は、決して衛生的な厨房とはいえませんでしたし、居室でもいろいろな不便

さがあり、様々な苦労がありました。そして、何より、そこにいる子どもたちの不向き、住みにくさは、想像を超えるものがあつたと思います。

食事のことに関して言うと、約60人の子どもと職員が、決して広いとはいえない食堂で食事をしていました。にぎやかではあるけれど、落ち着ける場所ではなく、毎日が嵐のように過ぎて行きました。盛付けしからずいぶん時間がたっているため、ご飯、汁などは、冷めていきます。適温の食事を心掛けるのですが、限界がありました。中高生などは、特に朝の欠食が多く、食べてもらえない食事を残念な思いで、処分したこともありました。何もしくなくてもご飯がそこにあるので、平気で食べ

なかつたり残したりできるのでしようか。本当に家庭とはほど遠い環境でした。その中で、少しでも家庭的な雰囲気ですべてあげたいという思いで、施設長や先輩職員が中心となり、誕生日会、朝食会、冬の鍋料理など、いろいろ工夫されました。

仮舎生活

「ゆうりん」が生まれ変わる、新しい建物になる。どんな施設にしたらよいか。他施設にも見学に行きました。いろいろ議論され、その結果、できるだけ家庭に近い機能を持たせたいということで、小舎制の導入が決定しました。幼児から高校生までの縦割りで養育すること、乳児



院も併設することなど、一つ一つ現実のものになっていきました。

建て替え中は、仮舎への引っ越しと、いろいろな課題がありました。食事はどのように作ればいいのか。設備をどのように移設するか。大変な毎日でしたが、新舎での生活の練習ができたという点では、仮舎生活も、有意義だったように思います。各部屋にはキッチンがあったり、部屋の炊飯器でご飯を炊くようになったこと。汁物を鍋で食べる前に、温めて盛り付けること。小人数でテーブルを囲んで食事できること。自分たちで盛り付けること。食器を部屋で洗って食器棚に保管すること。大舎では経験できなかったことが、日常になりました。今までの食事と材料も、作る人も変わらぬのに、「有鄰のごはん、おいしくなったんじゃない？」そんな声も聞こえてきました。環境によって、同じご飯でもおいしく感じられることを、再認識しました。部屋

の中に、ご飯の炊けるにおいがする。当たり前のことなのに、新鮮に感じられたことを覚えていきます。

新舎での生活

そして、仮舎から新舎へ引っ越ししました。小舎生活の練習が、仮舎でできたので、新舎での生活は、比較的スムーズに移行できたように思います。

現在、栄養士が立てた献立を調理室で調理し、小舎に運び、温めなおして、盛り付け、食卓に出し、ご飯は、部屋で炊いています。土・日曜日などは、簡単な料理を部屋ごとにやっています。誕生日会は、献立を考え、買い物に行くのも、部屋ごとで行う全調理の形です。

環境は整いました。まだまだ課題は多いですが、家族団欒のように、ゆったりと食事をして、今日一日のことを話題にし、さりげなく食事マナーを教えていけたらいいと思います。また、部屋で調理する機会を無理のないように増やし、少しでも、子ども達が、食に興味を持ってほしいと考えています。私たちの仕事は、ただ食事を作っただけ、子供たちに食べさせれば、それで終わりではありません。ご飯ができるまでには、たくさんさんの時間と手間がかかっていることを知ってほしいです。「今日のごはんおいしかったよ。また作ってね。」「この料理、どうやって作るの。」「もったいなから、嫌いな物も、頑張って食べるよ。」「そんな声がたくさん聞けるように、子供たちに、食を通して愛情を伝えていきたいと思っています。」



部屋の中には、
ご飯の炊けるにおいがする……
当たり前のことなのに
新鮮に感じられた



ありがとうございます

平成21年4月1日から平成22年3月31日までに、寄贈・招待・ボランティア活動にご協力いただきました方々の紹介をさせていただきます。

～寄贈関連 個人～

松山 信 野中 利紀 安里 啓 荒川 つや子 入山 鈴子 田中 めぐみ 木村 英男 久野 章雄
子安 成幸 ジェイムス・ヘイブンス 杉本 亨 鈴木 千代美 片岡 政子 鈴木 勝 竹内 慶三郎 永坂 秀子
檜崎 正剛 林 記代 藤本 栄 深谷 光弘 山口 ミツノ 高柳 佐和子 坪田 節子 丹波 和雄
青木 清美 竹内 智景 堀川 朱美 西元 二三野 堀 エイ子 植田 望 二村 繁美 上村 優子
真木 芳子 菱田 實 白砂 美紗子 矢口 節子 浜村 敏男 大橋 晃一郎 柴田 純夫 後藤 美恵子
中垣 貴子 たかはし さだこ 加藤 敏 加藤 鉦代 皆川 節子 村瀬 久美子 後藤 決美 菱田 忍
原田 いずみ 川井 一義 奥村 和則 八原 正史 二村 信嘉 小林 智美 柴田 真由美 坂野 勝治
水野 太久蔵 池田 幸平 早川 松男 小野 真由葵 山口 和子 高橋 佳絵 杉山 實朗 林 俊和
堀 敏郎 堀口 るり子 浦澤 明美 大島 輝夫 三木 健義 福田 民子 鈴木 公 針山 信康 下村 康範
依田 欣哉 鬼頭 菊恵 末松 智恵 間部 豊子 小尾 朱美 田中 直子 久野 正巳 鈴木 孝幸 二村 芳治
朝倉 絹代 真鍋 哲 浜田 文雄 林 平岩

～寄贈関連 団体～

(株)アイライフ 賛否両論 緑区歯科医師会 菱田實と遊人展 名古屋市子ども青少年局 鳴海学区連絡協議会
荒川精肉店 (有)一千万水道工業所 (株)コジマ (株)地域計画建築研究所 (株)水野工務店 たうち小児クリニック
日本キリスト教団鳴海教会 アピタ緑店 愛知県共同募金会 社団法人熱田法人会女性部会 (有)尾州商会 井村屋製菓(株)
なごや農業協同組合 大高支店オールドライバー カーブス (福)中央有鄰学院 役員有志 カルビー(株)名古屋支店
クリエイティブヨーコ サンシャインクラブ コカコーラセントラルジャパン(株) 財団法人資生堂社会福祉事業財団

(株)ジャパンエナジー (株)シヨクブン (株)ジョブ 日立親切会中部支部 西友 大宇ジャパン(株) 大洋薬品工業(株)
(株)タキヒヨー 中日新聞社会事業団 中部善意銀行 中部電力(株)名古屋支店 (財)陶和福祉会 中日本興業(株)
なごやかサポートみらい 名古屋観光ホテル (株)デザインユミ 名古屋市食肉三水区協同組合 名古屋住友クラブ
日興コーディアル 名古屋商工会議所 守山商工会 鳴海商工会 有松商工会

(株)日本出版販売名古屋支店 日本鏡餅組合 白水運輸(株) フジトランスコーポレーション 舟橋商店 丸美産業(株)
村瀬鮑行 フリップモリスジャパン(株) 牧野生鳥鶏肉問屋 水谷歯科クリニック 三菱東京UFJ銀行 緑教会月日教おうかんみち
緑区更正保護女性会 緑区地域女性団体連絡協議会 緑鯨城会 みどり女性会 (株)名糖産業 リゾートトラスト(株)
還暦虎免会 新エネルギー導入促進協議会 財団法人中央競馬馬主社会福祉財団 社団法人中京馬主協会

東海アイスクリーム協会 P-POINT 名古屋名南ロータリークラブ 名古屋東南ロータリークラブ 社団法人熱田法人会
(株)ITO 社団法人熱田法人会 青年部会 名古屋名南ライオンズクラブ 熱田麺類組合 鈴木接骨院

名古屋キリスト教社会館 金城六華園 駒方寮 名古屋養育院 清新会 鳥取子ども学園 名広愛児園

和進館児童ホーム 大高南学区民児協議会 大高南学区連絡協議会 慈友学園 長寿寺 那爛陀学苑

愛知県児童福祉施設長会 溢愛館 (有)リハウジング名古屋 大高児童民生委員協議会 大高学区区政協力委員会
真生乳児院 鳴海学区区政協力委員会 (株)エーアイディー 阿部建設(株) 丹羽内科 木村スポーツ

～招待関連～

熱田神宮宮庁(株) ウェルストーン・ヴォイス 特定非営利法人夢シート トヨタ部品愛知共販労働組合

ビストロ・ラ・ポルト・マルセイユ 名養クラブデイキャンプ実行委員会 名鉄自動車学校 四季(株) 連合愛知
名古屋名南ロータリークラブ (株)山本建材 名古屋ホストライオンズクラブ 鳴海教会 シルク・ド・ソレイユ

～ボランティア～

熱田ローターアクトクラブ (市原 賢人 犬飼 佳菜子 犬飼 景子 魚住 明未 江口 理沙子 小岩 大騎
近藤 教宏 高木 麻有 古屋 佳菜子 渡辺 直弥)

一歩の会 (松永 正子 水谷 桂子 山岸 せい子 朝倉 絹代 荒川 八千代 矢口 由美子 井手 きよ子
大市 敦子 梶野 智子 篠田 忠昭 早川 久代 阪野 厚美)

ドクターズバンド (福嶋 俊郎 矢守 信昭 赤座 薫 杉本 亨)

イタリア料理慰問 (山田 宏巳 濱崎 龍一 坂根 正史 猪俣 憲一 笠原 将弘 河畑 律子 木原 章太
小林 秀徳 鈴木 知己 栖原 一之 高尾 僚将 鯨江 真仁 成澤 由浩 西本 容子 榊村 紘基
森 博史 吉田 清美 吉原 友美)

りんの会 (蜂須賀 正子 早川 けい 仲野 禮子 岩田 静枝 丹下 由子 鳥屋尾 千鶴 岩本 純子
桂 要子 永井 千里 三浦 光和 宮島 友子)

美容奉仕・シュリンプ (田淵 則之 石川 瑞恵)

中京大遊びグループ (松廣 亜佑美 山本 史織 毛利 日咲 井原 沙由未 佐藤 誌小里 佐藤 みなみ
加納 郁子 加茂 希望)

学習指導 (西川 紀子 寺尾 法子 土屋 敬輔 石原 達也 山本 健人 稲垣 美由紀 山田 尚美
大島 さやか 中橋 千穂里 青木 智美 吉田 智克 澤田 和夏 太田 洋一 小木 祐二 大田 和秀
鈴木 さゆみ 佐藤 泰子 山田 陽子 松尾 幸子)

フィリップモリスジャパン(株)

(順不同、敬称略) ※紙面の都合上内容は省略させていただきます。

※記載されていない方がございましたらお許しください。

家具も新しくなりました

平成21年度財団法人中央競馬馬主社会福祉財団並びに社団法人中京馬主協会の助成事業により、ゆうりんの各小舎にカリモク製のダイニングセットとベッドを整備することができました。子ども達には、日々の生活の中で、本物の木のぬくもりを感じながら大事に使ってもらいたいと思います。

財団法人中央競馬馬主社会福祉財団並びに社団法人中京馬主協会に対して心よりお礼申し上げます。



乳児院

ほだかに新しいクルマが届きました



この度、郵便事業株式会社より年賀寄付金配分金を受けて乳児院ほだかに通院や外出等のための送迎用車両を購入させていただきました。今回助成を受けた車両は、ベビーカーの車内への乗り入れが容易な車内にゆとりのあるコンパクトカーです。

郵便事業株式会社をはじめ、ご協力賜りました皆様方に心より感謝申し上げます。

平成21年度決算・事業報告

(単位：千円)

(単位：千円)

勘定科目		法人本部	児童養護	特別会計	合計
事業活動収支の部	収入				
	措置費収入	0	167,839	0	167,839
	運営費収入	0	12,528	0	12,528
	経常経費補助金収入	0	652	0	652
	寄付金収入	0	3,858	4,060	7,918
	雑収入	27	6,609	0	6,636
	引当金戻入収入	0	2,400	0	2,400
	国庫補助金等特別積立金取崩額	0	0	447	447
	事業活動収入計	27	193,886	4,507	198,420
	支出				
人件費支出	0	130,379	0	130,379	
事務費支出	151	11,578	14,508	26,237	
事業費支出	0	33,252	14,528	47,780	
減価償却費	0	3,041	848	3,889	
事業活動支出計	151	178,250	29,884	208,285	
事業活動外収支の部	収入				
	借入金利息補助金収入	0	435	0	435
	受取利息配当金収入	3	11	14	28
	経理区分間繰入金収入	6,926	0	13,000	19,926
	事業活動外収入計	6,929	446	13,014	20,389
	支出				
	借入金利息支出	0	0	749	749
	経理区分間繰入金支出	0	19,911	14	19,925
	事業活動外支出計	0	19,911	763	20,674
	特別収支の部	収入			
施設整備等補助金収入		0	0	227,123	227,123
施設整備等寄付金収入		1,728	0	10,500	12,228
特別収入計		1,728	0	237,623	239,351
支出					
固定資産売却損・処分損		0	2,121	0	2,121
国庫補助金等特別積立金積立額	0	0	252,359	252,359	
特別支出計	0	2,121	252,359	254,480	
繰越活動収支差額の部	当期末繰越活動収支差額	14,282	-32,996	21,728	3,014
	その他積立金取崩額	0	0	0	0
	その他積立金積立額	8,628	0	0	8,628
	次期繰越活動収支差額	5,654	-32,996	21,728	-5,614

資産の部		負債の部	
科目	金額	科目	金額
流動資産	210,301	流動負債	258,538
基本財産	603,857	固定負債	148,116
その他の固定資産	40,767	負債合計	406,654
		基本金	180,629
		国庫補助金等特別積立金	251,911
		その他の積立金	21,345
		次期繰越活動収支差額	-5,614
		純資産合計	448,271
資産の部合計	854,925	負債・純資産の部合計	854,925

事業報告

建て替えにおいて、大舎制（中舎制）から小舎制への移行、出来る限りの個別的なケア、乳児院からの一貫した養育、家族的な援の4つを大きな目標とし子どもたちの人権が守られる施設作りに取り組みました。人の確保や、職員教育、環境作り（設計）、運営体制を作る準備期間となる等、法人運営上においても歴史的な一年となりました。

施設整備について

21年度は施設整備に伴い、旧舎から新舎への移行期間として職員、子どもと共に苦勞をし、良き体験を積み重ねた年度となりました。限られた環境での仮舎、鳴海寮において子どもたちの生活を安全に守り、養育を図る活動と運営を行いました。また、緑寮においては、施設整備に伴う事務活動、施設運営、経理に関わる事業と未就園児童の保育活動を行いました。大きな問題はなく、子どもはむしろ積極的に仮舎生活を過ごし、小舎制への試し期間となりました。

施設整備に伴い設計検討の作業及び備品などの検討、及び購入に関わる運営を行いました。備品購入については家庭に近いもの、良質なものの、施設のイメージをぬぐい去るものを選択、安価に購入できるように努めました。設計については良質、頑丈な、より家庭に近い小舎、ユニットを希望し、成長期の子どもに安心、安全感及び情緒を育む居場所となることを目標としました。

寄せられた苦情とその対処

子ども達、家族、地域住民から法人や施設に対して何件かの苦情が寄せられました。内容は、子ども達の処遇や生活に関わるものが中心でした。それぞれ苦情に対しては、苦情処理委員で対応するなど適正に処理し、理解を求めました。